

共立女子大学文芸学部報

共立女子大学文芸学部報
第143号
発行日 2023年7月5日
編集・発行 共立女子大学
文芸学部
〒101-8437
東京都千代田区
一ツ橋2-2-1
発行責任者 藤田岳久
創刊 1968年12月
題字 遠藤慎吾
第二代文芸学部長

学部報に関するご意見・ご感想を以下のメールアドレスまでお寄せください。
gakubuho@kyoritsu-wu.ac.jp

学部報は共立女子大学公式HPの「文芸学部」のコーナーでもお読みいただけます。



第143号	主目次
第1面	俳壇・歌壇 創作
第2面	先輩たちの社会人生活 大学随想
第3面	特集 文芸学部創設70周年 学部長から
第4面	領域から 心象点描

俳壇

題「音」(遠藤耕太郎・選)

桜咲く合図の音が有ればいいのに

野本珠希

胸響くステージの君のウインクの音

ときしおん

花冷えや朝餉の音は厨から

二宮察子

トコトコと跳ねる靴たち新芽の音

中野風彩

雨音に紛れて通ふ春の猫

大宮綺重郎

静寂の音をきわめて椿落つ

黒須貴志子

惹かれては音に揺れ動く浴衣の輪

小里みのり

音もなく時さえ止めて不意の寒月

今井秀和

行き交いし選筆の騒音山笑ふ

福居良子

春の悲嘆警報音で蘇る

和巳

テーマ「京都」(福嶋伸洋・選)

鯉の骨切るは心地の良き囃子

オレオ

あだしのや春をみあげるほとけたち

上野慎也

亡き人は皆美しき人文字

藤原達也

コロナ明けにぎわい戻す京の花

永田迪子

歩きに歩き賀茂の枯れ枝を見上げる

片山耕二郎

花火夜は人も量子もエンタングル

谷田貝雅典

歌壇

題「猫」(岡田ひろみ・選)

サトシ凄くそう思いながら抱き上げるピカチュウと
同じ6キロの猫
ねこのしもべ

戸

遠き日に我を慕いし猫共よ何を思いて我を友とす

藜

いつだってなりたいたいのほきつと届かない棚に何度も
ジャンプしてる猫

戸

帰省した私のことを我先に迎えてくれるうちの猫さん

野本珠希

枯れ落ち葉ひとつかぶりて冬晴れの縁に子猫の寝そ
べりており

黒須貴志子

ふみふみとお腹のうえでダンスする猫さん私うどん
じゃないよ

タイのモジモジ

B.B

ソラが逝きからっぽになった陽だまりに香箱座りの
地域猫かな

北村弥生

猫かぶり何枚目だろう分からないかじけ猫のあな
たのせいだ

河豚イルカ

テーマ「スイーツ」(福嶋伸洋・選)

終戦後はじめて食べたシュークリームその味舌にと
どまりており

湊一子

お祈りを理由に食べるチョコレート内定したら何食
べよう

胃痛

人生で最初に食べたスイーツは食べさせてもらつた
にちがひない

上野慎也

バスデーケーキの上にいるような雪の夜道をひと
り歩めり

雨谷詩穂

もちもちの丸が8個でこの笑顔前は100円だった
ような

なんでも値上げだなあ

飴舐めて「今日はいける」と信じたが社会の厳しさ
身体に染みる

わーふ

草餅を頬ばる母を雲に見て懐かしき日々胸を熱くす

二宮察子

スナックに少しと思ひ手を伸ばす美味しさ溢れる後
罪悪感

みるゝな

創作

振り子の中心

眠るサカナ

先生、少しお時間ありますか？
大事な話があるんです。

実は私、先週の定期テスト、英語のテスト中に見ちゃったんです。

A子……風紀委員のA子さんが、
カンニング、して……制服の袖

に紙を入れていたのを見てしまつて、
あまりに驚いたのと、A子のこ

とを個人的に慕っていたのもあって
ショックで当日言い出せなくて

……。でもA子の友達として見過
ごす訳にはいかなないと思つて勇

気を出して先生に話しました。先
生なら、いつもみたいにきつと何と

かしてくれと思つたので。
え？ 信頼しすぎですか？ そ

んなことないですよ。だって私のパ
パ活がバレそうになった時も先生

何とかしてくれたじゃないですか
……。私先生のことすごく信頼して

ますし、大好きなので大事な友達
の一大事も先生に頼りたくなつち

うんです。
それじゃあよろしくお願ひしま

す。
だから、何度も言いましたけれど

私はカンニングなんてしていません
ん。どうして信じて下さらないん

ですか？ 告発があったからって
……私よりもその人の方が信じら

夢国家

ねこま(文・絵)

というかそもそも私を告発したク
ラスメイトって誰なんですか？
……すみません、ついカッとなつ
てしまつて。でも先生はいつでも私
のことを絶対的に信頼して下さつ
て、信じて下さっていると思つてい

い眠りについた。
それから一週間、僕たちはまだ
パークから出られずにいた。それ
どころか、閉鎖解除の見通しすら
立っていなかった。最初は不安や不
平を口にしていた者も、この頃には
この特別な状況を受け入れ始めて
いた。レストランに並べば、温かい
食事が振る舞われた。必要なのは
キャストに申し出れば大体無料で
手に入ったし、シャワーも裏にあ
る従業員用のものを交代で使用す
ることができた。

僕たちが夢の国の住人になつた
のは、十一月の末だった。カスト
リアルキャストとして働いていた
僕が、いつもと違った雰囲気を感じ
取つたのは、パレードが終わつた
屋過ぎで、近く
のゲストの会話
を耳に挟んだ頃
からだだった。ど
うやらエントラ
ンスに警察が大
勢集まっている
ようだった。そ
れから間もな
く、園内放送でパークの一時的な
閉鎖が伝えられた。

半月が経つ頃には、それぞれが
寝泊まりに使うアトラクションを
拠点として、思い思いに過ごす様
になつていた。子どもたちはよく
トゥーンタウンに集まって遊んで
いた。僕は日中は毎日外に出て、掃
除をしながらパークを歩いて見て
回つた。ゲストの多くがキャストの
手伝いを申し出てくれていたし、
本当は休んでも良いのだけれど
途中出会つた四歳の女の子が、恥
ずかしそうに「今日わたしの誕生



日なの……と教
えてくれたので、
バスデーシー
ルに名前を書いて
服に貼つてあ
げた。周辺のゲ
ストやキャスト
に「おめでと
う！」と声をか
けられた彼女はとても嬉しそう
だった。

各本部からスパーバイザーが
急遽集められ、緊急の会議が行わ
れた。約二万人のゲストの衣食住を
考えなければならぬ。夜になれば
室内で寝泊まりさせるために、ア
トラクションのQラインを解放し、
収容することになった。キャスト総
出で人数をカウント、整備をし、
閉園時間から日付を超えるまでの
三時間で、全てのゲストの居場所
を確保することに成功した。その
夜は薄暗い照明の中で、人々は浅

次の日、この生活はあっけなく
終わりを告げた。僕たちは、夢の
国で暮らしていた。



第二期生(1954年度入学) 仙葉弘子さんインタビュー

創設当時の神保町

入学されたのが1954年ですが、文芸学部はどういうところでしたか?

仙葉さん(以下敬称略) 木造の古い校舎だったんですよ。ガタピシしてね、足音が響いて。地上2階、地下1階建ての、元は寄宿舎だったところだし。それで周りが活版屋とか製本屋とか、個人のお店がばーっとありましてね。

神保町の原点ですね。

仙葉 今ビルがあるところが全部個人の家でした。夏は窓を開けるとすごい賑やかな音が、がっちゃんがっちゃんという印刷とかの音がしてね。街のお豆腐屋さんも通って。

高いビルはなかったんですね。

仙葉 まだ2階建てくらいでしたね。文芸学部には綺麗な星のような先生方が集まって出立したんですよ。お偉方のおじいちゃん先生が来てくださったって。

文芸学部の雰囲気

先生方と学生さんたちはどんな感じでしたか?

仙葉 和やかでしたね。一学年に

200人くらいいて、国文と英文と芸術の三つに分かれていました。その芸術が美術と演劇に分かれておりまして。それから、私たちが入ってから学生自治会というのができました。

どんな活動をされていたんですか?

仙葉 全学集会、総会とか、年に2回くらいあって。それまでは学主催で山登りとかスキーとかをやっていたのを、自治会の部になりました。クラブ活動にしたいんです。

そこからサークルとかが生まれていったんですか?

仙葉 そうなんです。教養部、体育部、テニス部、ダンス部、体育の先生がダンス好きの方で、体育の時間は社交ダンスでした。

じゃあ登山とかスキーにも行かれたんですか?

仙葉 その前は学校主催のイベントで、でも、何年前になくなったかな……。私はまだOG会をやっています。私はもう登りませんが、他の方は登っていますね。大学のときはどんな山に行かれたんですか?

仙葉 北アルプスとか、南アルプスとか、それから月に一度くらいは近所の丹沢とか奥多摩とか秩父とか。夏休みに大きい登山をしまして。テントも揃えまして。大鍋しよって。4、50人いましたね。



第1期生 江川優香里さん提供

それから、放送部も活発にやりましたね。ドラマを作ったり、そのコンクールに参加したり。

授業の様子

印象に残っている授業はありますか?

仙葉 いろいろありますが、私は美術だったんですよ。山田智三郎先生のゼミだったんですけど、4人で先生を囲んでゼミを受けていました。本を訳したり、「The Meaning of Art」という本を、ここまで誰が訳すとかね。それで先生がときどき美術館に連れて行ってくださるんです。おまけにレストランまで行っちゃったり(笑)。4人だもんですから。楽しかったです。でも私、山に行っていてあんまり勉強してない(笑)。

演劇の方も、講座がお休みのときは17番の数寄屋橋の都電に乗って歌舞伎座まで行って一幕目まで見たりしてましたね。それから靖国神社の例大祭がありましてね、すごかったですよ。春と秋と。見世物小屋が出るんです。ろくろっ首とか、オートバイの曲乗りとか。よく昼休みにみんなで行きました。

じゃあ4年間はあつという間でしたね。

大学に行く目的

当時は、大学に行くってというのはどういう意味のあることでしたか?

仙葉 今はお仕事を求めて大学に行くわけですか?

基本的にはそうなのかなと思います。

仙葉 仕事は全然考えていませんでした。

じゃあ、目的は何でしたか?

仙葉 何でしょうねえ(笑)。もうちょっと何か学びたいという感じかな。だけど、高校の卒業のときも就職した人は10人くらいでしたからね、当時。みんな短大か大学に行きましたしね。それで、新しい文芸学部……。当時は文芸学部っていうのは成城にしかなかったんです。でも、共立の方が科目がずいぶん広いので、ここにしました。5つ年上の従姉がここ

の家政学部に来ていたんです。その話をいろいろ聞いていて、いいなあと。周りの女性で就職する人はまだ多くなかったですか?

仙葉 学部のお友達はだいぶ就職に行きました。手に職をつけるために?

仙葉 そうじゃなくて、ぶらぶらしてただけ(笑)。洋裁学校と、東京會館のお料理学校。

それから結婚を?

仙葉 そうなんです。お見合いです。

当時はみんなお見合いです。親戚の者の紹介で、写真を交換して。昔ですね。

今もマッチングアプリで似たようなことをやっているかもしれない(笑)。それで、実際にお会いされて?

仙葉 お付き合いしようというところで。もう、周りがやっちゃうんです。進めちゃうんです。本人の気持ちとしてはどうでしたか?

仙葉 まあこんなものかなと(笑)。おいくつおときに結婚されたんですか?

仙葉 24くらいかな。当時はそれくらいでする方が多かったんですか?

仙葉 もっと早くする人はしてましたね。

共立講堂

仙葉 今は全学集会はないんですか? 前は月に一回、薫子先生のお話があって、全校、共立講堂に集まって……。今は講堂はないんですかね?

講堂はありますよ。1956年に火災で焼失したんですよ。仙葉 焼けたのは3月、期末試験の期間中だったんですよ。うちにいて、試験どうなるんだろうって思ってた。あるのかなあと。思ってた学校に来てみたら、講堂だけ全焼してました。

講堂再建のための寄付の募集があったりして最新設備の講堂ができあがり、私たちは翌年3月に卒業式をすることができました。黒紋付に黒の袴、または黒のスーツを着て、見渡す限り真っ黒の会場でした。

講堂を外に貸出していたのがたくさんあったんですよ。

仙葉 昔、戦後はね、いろんな劇場が焼けちゃって、共立講堂はすばらしい劇場だったんですよ。表を通ると、いろいろな看板が出ていて、超有名な劇場でした。当時の大人気スターの大川橋蔵ショーもありました。

共立講堂は戦争のときに空襲で焼けなかったんですよ。仙葉 焼けなかった。それで、オペラもやったりお芝居もやったり、いろんなのに使われてました。当時はもう劇場不足で。それで、共立講堂はすごい有名でした。全学集会に取るのもたいへんなくらい。大劇場でした。

70周年記念誌に寄せて

上田明子

私が学生の頃、退屈に思えたいくつかの授業も、ふと学部報に載っている興味深く面白い文章がその授業を受け持った先生によって書かれたものだった時、次はもう少しちゃんと受けてみようと思えたもので。と、こう書いて目に飛び込んできたのは、昭和44(1969)年発行の第2号に掲載された「つまらない講義(河盛好威)」でした。ぜひお手元の『文芸学部報』(創刊号(第141号)第1面復刻集)で読んでみてください。

今年文芸学部が創設70周年を迎えたのを記念してこの「復刻集」は制作されました。学部報は学部創設15年目に創刊されたので、55年間の文芸学部の在り様が、先生方や助手さん、学生や卒業生、また学園関係者によって生き生きと書き記されています。紙面の都合上、中面(第2、3面)に掲載されることが多い学



生の(大学生活に関する忌憚ないコメント含む)文章が少ないのは残念ですが、第1面には、先生方から学生に読んでほしいと願う、おそらく、当時の一番熱い思いが刻まれています。

専門分野の内外を問わず先生方及された「後ろを向いて生きる(遠藤耕太郎)」(第118号、2013年発行)も今こそ一読を。

記念すべき第100号(2004年発行)の「考えていたこと(柴田翔)」は、柴田先生が定年を迎えられる前年に書かれたものです。授業を通じて学生に伝えたかったことが、有名な和歌の「深読み」を通して語られます。そういう、当時の柴田先生と同じように来年に定年を迎える半沢幹一先生は、今から10年以上前の2011年の紙面(第114号)にすでに

退任の辞を載せています。なぜ? と気になった人は、その「面白可笑しい理由にとまらず「深読み」を試みましょう。柴田先生の願いは、私にとりて在中冒頭のように思える文章に出会えただけで果たされていた、といえば先生方に叱られるでしょうか。(学部長室)

最近「タイムパフォーマンス」(略して「タイム」という言葉が聞かれるようになりました。より短い時間で目的を達成することや高い効果を得ることを「タイムパがよい」と表現します。自分が好むことや価値があると

思うものに多くの時間を充てたいという若い人々の考え方が、この言葉が生まれた背景にあるようです。

学部長から

のよい心がけだと思えますが、「タコソボ化」してしまうのはなんだかつまらないような気がします。いろいろなものを見聞きすることで視野が広がり、社会における自分なりの視座を持つことがで

随想(堀新)は、「文学と芸術は嫌い」だったという堀先生のエピソードメイキングを瞬間に立ち会える素敵な文章です。また、災害時や不安定な社会情勢の中にある「文学」「芸術」について言

文や卒業制作でぜひ「文芸学部的タイムのよさ」を体現してほしいと思います。

(教授・メディア領域・藤田岳久)

さるのではないのでしょうか。それ

もまた、とても充実した時間の使い方だと思えます。

文芸学部はそういうことを七十年間ずっと続けてきました。先輩

人の思いや社会の考えを知り、共感を持って他者と語り合ってきた。学生のみならず、それを心がけ、卒業論文や卒業制作でぜひ「文芸学部的タイムのよさ」を体現してほしい

藤田岳久

特集 文芸学部創設70周年



ロゴデザイン: 鈴木ひかり

領域から



クセになる辛さ！
魅惑のタイランチセット

是枝菜々美

今回ご紹介するお店は、共立女子大学よりほど近く、タイ料理店の「メナムのほとり(神保町本店)」だ。このお店は、創業30年以上の老舗タイレストランで、本場のタイ料理が味わえると大変人

ライスカレーまんてん

平野真実

大学から水道橋の方に向かって徒歩10分くらい。白山通りの脇道に「まんてん」というライスカレー屋さんがあります。橙色のひさが目印で、店先のショーケースにはカツカレーや、コロッケカ



レー、ウインナーカレー、シウマイカレーなど、懐かしい感じにメニューの食品サンプルが並んでいます。店内は年季の入った味のある空間で、厨房を囲むカウンター席には、男子学生やスーツ姿の男性が多く、みんなが背を丸めて黙々とカレーを味わっています。メニューについて、カツやコロッケのカレーは言わずもがな、ウインナー、シウマイとカレー



気のような。実際に13時ごろ店内に入ると、満席で人気な様子がかがえた。その日注文したのは、大好きなグリーンカレーとトムヤムクンがどちらも楽しめる「Bランチ」だ。内容は、タイの炒め物・トムヤムクンスープ・ごはん・タイカレー(レッドまたはグリーン)・揚げバナナのココナッツミルク添え。少しずついろいろな料理を楽しめるので、わがまま女子には嬉しいセットだ。しかも、これだけのランチで1200円と価格も文句なしである。

特に筆者が気に入ったのが、メニューにあるカレーを差し置いて申し訳ないのだが、付け合わせのト

ムヤムクンスープである。グリーンカレーもなかなかスパイシーなため、この口にとんでもない辛さのスープがきては、汗が吹き出し

てしまうという恐ろしい口をつける

と、想像と違い、まるやかな辛さで、酸味やうまみが絶妙なバランスで、スイスイ飲めてしま

り自由だそうで、満腹にもかかわらず、スープをお代わりしてしま

ぱくぱくorぱくぱく

柏倉明花

「ぱくぱく」と食べるものといえ、パンケーキなどが思い浮かぶ。それでは、「ぱくぱく」と食べるものとは一体何だろうか。神保町へ通い始めて6年目。折



角なら普段通らない道でランチをしようとする。靖国通りから錦華通りへ入り、うどん、担々麺、つけそばと種類のお店が立ち並び中、「とん汁とからあげの専門店 ぱくぱく」という看板を見つけ

おひとりでも！
麵屋33のスヌ

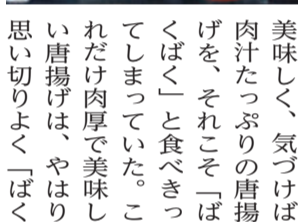
千葉百々花



白山通りの水道橋方面にある、歌舞伎役者の看板が目印のお店「麵屋33」。こちらで今日頼んだのは「つけ麵33塩(950円)」と、

てきた。

まず手を付けたのは、ご飯茶碗より一回り大きな器に入ったとん汁だ。具材は至ってシンプルだが、大きめに切られていて満足感がある。続いて、熱々の唐揚げを口へ



詰まっている上に、ふわり柔らかく食べやすい。しっかりと下味が

いすね！
注文後空腹がピークになった頃にサビスのサラダ(ラーメン屋さんで！)が出て、食べ終えるまでもやちよどの頃合いに主役が登場します。小麦粉が香りながらも軽くてすすりやすい麺ととも

みのあるつけ汁がよく合い、鰹節と柚子の風味が口いっぱいに広がります。よくある塩とは一味どころか三味は違う、中毒性の高い塩味です。奮発、と書いたトッピング

ですが、こちらもどれも絶品で、250円で大満足！幸せに包まれますので、ぜひ試していただきたいです。

火、金、土、月でメニューが変わります。珍しいメニューがたくさんありますが、どれを選んでも外れなしです。特に、土、月限定の「鶏エスプレッソ」が名物み

です。名前だけでも食べてみたくなりませんか？
学生時代には空きコマに友人と二人で毎週のように通い、食後に特大のタピオカを飲むのがルーティンでした。別の曜日に一人

でも行った記憶があります。いつもあたたかい雰囲気と気配りに溢れたお店です。ひとりラーメン屋デビューにもいかがでしょうか！
(文化領域助手)

異動

〈退職〉

青柳 舞 (芸術領域) 助手

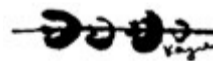
鈴木 利奈 (芸術領域) 助手

〈新任〉

神長 夏海 (芸術領域) 助手

鈴木 綾奈 (芸術領域) 助手

心象点描



山森宙史

挿画 わいるどり



故郷」と呼べる場所が比較的よくある。生まれ故郷の愛知をはじめ、学生時代を過ごした兵庫、そして、最初に働いた香川などだ。また、各県のなかで何回か引越した経験も多かった。地域単位でみると、もう少しその数は増えたりもする。

2008年より日本テレビ系列で放送されている「アナザースカイ」という番組がある。毎回話題の有名人や芸能人のゲストにフォーカスし、彼らにとって「憧れの地」や「第2の故郷」とも呼べる場所を訪れ、エピソードトークを交えながら自身の抱えている想いや人生観について語る、といった内容の番組だ。取り上げられる場所が海外が多く(最近では国内も増えてきたが)、海外経験が乏しい自分にはあまり親近感が沸かない内容ではあるものの、「第2の故郷」という、生まれ故郷ではないがかついていた場所への郷愁の念」という点では強く共感できる部分がある。

私はこのような第2の故郷のことを、以前から自分の中で「サブ故郷」とか、「ジェネリック地元」と呼んでいる(決して「これがわたしのアナザースカイ！」とは言わない)。そして、私には「サブ

を酌み交わす時間は、「観光」とも「コミュニティ付き合」も異なる不思議な時間と解放感を与えてくれる。そして帰る時はいつもどこか名残惜しく、寂しさを感じる。ところまでがセットである。

卒業論文・卒業制作表彰

文芸学部 さくら賞

脇屋 京香

英語英米文学 ひばり賞

小泉 佳永・湖幡 理紗

古川 真衣・渡辺紘菜子

フランス語フランス文学 マリアンヌ賞

上村 恵子・桑山日菜子

劇芸術 すみれ賞

石原里衣子・森田 万結

植草 志保

造形芸術 プリマヴェーラ賞

齋木 彩音・武田 茉緒

村田磨理瑛

文芸メディア 優秀賞

藤岡乃英瑠・上野 沙月

文芸教養 文教賞

金光 紀花・河田 沙良

中山 真希・前山 純

山野邊梨花・岡 陽花里

岡本 晴香・水迫由梨映

編集後記

今号から新しく俳句・短歌の投稿欄を設けてみました。在学生・教職員・卒業生の作品が並ぶ、楽しい場になりました。投稿くださったみなさん、ありがとうございました。投稿いただきました。今後もまた奮って投稿いただけるように努めます。また猫のイラストもコンペ方式で募集し、3作品を掲載させていただきます。表でも裏でも多々ご助力くださった広報委員会助手の千葉さんと礎塚さん、ありがとうございました。(福嶋)